



和泉式部

寺田透

筑摩書房



日本詩人選 8 和泉式部

昭和四十六年四月二十五日第一刷発行
昭和四十六年七月十五日第二刷発行

著者 寺田 透

発行者 竹之内静雄

発行所 株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一(代巻)
振替東京四一二三郵便番号一〇一—一九一

印刷明和印刷 親本 鈴木製本

©一九七二寺田透

寺田透(くらた・とおる)

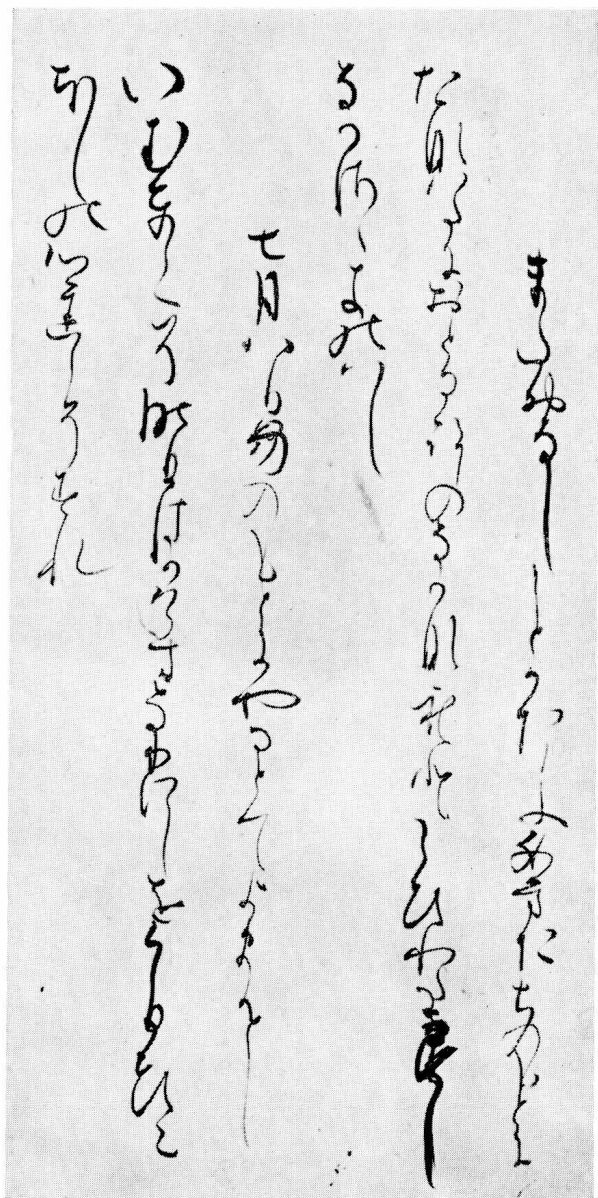
文芸評論家。大正四年横浜生。東大仏
文科卒。著書「思想と造型」「芸術の
理路」ほか。

(分類) 1392 (製品) 13208 (出版社) 4604

Handwritten Japanese calligraphy in cursive style (sōsho), consisting of several vertical columns of text.

伝藤原行成筆和泉式部集切
(逸翁美術館蔵)

伝藤原行成筆和泉式部集切
(逸翁美術館蔵)



若くは、
流んた
あつち
あつち

和泉式部和歌索引（初二句）

ア			
逢ふことを息の緒にする	51	いくべくも思はえぬかな*	288
あふことのありし所を	218	いづこにかたちもかくれん	241
あふ事はとまれかうまれ	70	いづれをか世になかれとは	212
曉は我にて知りぬ	81	いづれとも分れざりけり*	286~7
秋風はすごく吹くとも*	68, 146	いつしかと待たれしものを	223
秋のうちは朽ち果てぬべし	167	いつまでかけぶりとならで	284
秋の夜もあけでやはやむ	79	いつみてか告げずは知らん	133, 188
秋深きあはれをしらば	78	いでてこし道のまにまに	145
秋吹けばときは山の	74	いとどしく朝寝の髪は*	287
あさぢ原見るにつけてぞ	157, 186	稲荷にも言はると聞きし	243
あさましや剣の枝の	8	いにしへはありける事と*	110
あぢきなく思ひぞわたる	40	いにしへのありしなごらに*	121
葦分くる程に來にけり	250	命あらばいかさまにせん*	224~5, 238
天の原いつもは眺むる	19, 185	命だにあらば見るべき	231
あま舟に乗りぞわづらふ	221, 254	命だに心なりせば*	32, 83
あみだ仏といふにも魚は	250	今のまの命にかへて	45, 230
あみのめに風もとまらぬ	251	今はかく離れ島なる	153
あらさじと思ひし宿を	131~2	今はただそよそのことと	87, 212
あらざらんこの世のほかの*	52, 219	色に出でてひとに語るな	248
ありけりと佐野の舟橋*	133, 188, 257	岩躑躅言はねばうとし*	21, 78, 202
ありはてぬ命待つ間の	284~5	岩躑躅折りてもぞ見る*	263
ありはてぬわが身とならば*	284	うかりけむひとことこそは*	116
ある程はうきを見つとも	20~1, 178	憂きながらながらふるだに	137
あはれをば知らぬならねど	88~9	うきよりも忘れがたきは*	116
あはれこの月こそくもれ*	281~2	うしとでも人を忘るる*	31, 116
あはれなる事をいふには	211	うらむなよ我が名たてつと	272~3
あはれわが心になふ*	192, 197, 203	怨むらむ心はたゆな*	69
いかならんせこが旅寝の	19~20, 186	おほかたはねたさもねたし	51
いかにせんいかかはすべき*	116~7	おくと見し露もありけり	99, 100
いかにとは我こそ思へ	140	惜しけれどえやはとどむる	146
いかばかり思ひおくと	150	おぼつかなたれぞ背を	75
		おぼめくな誰ともなくて	252

音せぬはなきなるべしと	88	変らねば文こそ見るに*	34
おのが身のおのが心に*	32	代りあん塵ばかりだに*	64, 189, 203
おのれただみち来るしほも	77, 250	消えぬべき露の我が身は	169
思ひあらば今宵の空を	23	消え果つる命ともがな*	282
思ひきやありて忘れぬ*	107, 214	聞きと聞く人はなくなる*	204~5
思ひきや塵もみざりし	218	岸の上の菊は残れど	207
思ひたつ空こそなけれ*	255	来たりとも言はぬぞつらき*	75, 183
思ふこと皆つきねとて*	9	君をまたかく見てしがな*	
思へども悲しきものは	222~3		101, 108~9, 216, 232
思はじをあれたる宿に	80	君を見てあはれいくかに	44
おもはでも寝ぬべきものを	94~5	君がため若葉つむとて	216
折る人のそれなるからに*	74	君恋ふる心は千々に	93
小山田の守るも守らぬも	208	君なくていくかいくかと	44, 230
カ		君にかくよめの子とだに	247
かひなくてさすがに絶えぬ	195	きゆるまのかぎりどころや	87
還せどもこは還されず	248~9	けふはまたしのにをりはへ	9
かへらぬは齢ひなりけり*	287	草枕その結び目の	135
かをる香によそふるよりは	18, 42	くらきよりくらき道にぞ*	
かをる香はそながらそれに	187		12, 40, 127, 197
かかりきと人に語るな*	42	くれがたにをちの山辺は*	194
搔撫でておほしし髪*	120	くろかみの乱れも知らず*	49
かぎりあらん仲ははかなく*	232	けさのまに今は消ぬらん	166
かくしつつかくてややまん*	122	今朝はしも思はんひとは	92, 248
かくながらやむべき仲と	113, 252	恋ひて泣く涙に影は	105, 259
かくなき物にぞありける	76	恋ひて泣くぬにだに寝ばや	46
影みたる人だにあらじ	239	恋ひわぶと聞きにだに聞け	98, 103~4
かすが野に千代も経ぬべし	130	越えもせむ越さずもあらん	242
数ならぬ涙の露を	260	こころみにおのが心も	141
数ならぬ身をばきこそは	234	ことひとは許さざらまし	244
語らひし声ぞ恋しき	214	ことわりやいかでか鹿の	7
悲しきはこの世ひとつが*	121	来ぬひとを待たましよりも*	46, 229
かの山のことや語ると	223	この度は言に出でてを*	201
神かけて君はあらがふ*	243	此の身こそ子の代りには	106
かやり火のけぶりけぶたき	73	この世にはいかか定めん	112, 247
かるもかき臥す猪の床の*	236	今宵さへあらばかくこそ	282
かれをきけ小夜更け行けば	54	これぞこの人の引きける	18, 270

サ	
さをしかの朝立つ山の*	280
訝ゆる夜の数かく鳴は*	142
さるめ見て生けらじとこそ	236
さるめみて世にあらじとや	238
さはしもぞ君は見るらん	270
さはみれど打ちも払はで*	204
しのばれん物とも見えぬ	115
忍ぶれど忍びあまりぬ	117
しばし経る世だにかまかり*	287
しめのうちを慣れざりしより	246
霜枯れはわびしかりけり*	142
白浪のよるには靡く*	53, 179
しるければ枕だにせで	266~7
菅の根のながき春日も*	235, 238
すくすくとすぐる月日の*	286
すさめぬにねたさもねたし	264
捨てはてんと思ふさへこそ*	107, 202
すべなくて消えぬることよ	94
すみかとぞ思ふも悲し	252
住吉のありあけの月を*	47, 230
そのかみの人をも人と	162
そのかみはいかに言ひてか*	116
その中にありしにもあらず*	120
そのほどの夜半のねざめの	187
その夜より我身の上は	55
そむきぬとうき世の人し	208
それと見よ都の方の	283
それながらあるかなきかと*	118, 184
それながらつれなき物は	43
夕	
高かりし浪によそへて	177
たかせ舟はや漕ぎ出でよ	143
たぐひなく悲しき物は	229
田子の浦によせてはよする	48
立ちのぼるけぶりにつけて*	282

橘の花咲く里に*	16, 185
頼むらん人の命は	115
旅衣きてもかまばかり	182
玉簾垂れこめてのみ	44, 233
たらちめのいさめしものを*	38, 279
誰ぞこの問ふべき人は	87
誰にこのはなを見せまし	88
誰わけん誰か手馴れぬ*	157, 186~7
近く見る人も我が身も	283
津の国のこやとも人を	250
露を見て草葉の上と*	281
つれづれと空ぞみらるる*	35, 37
つれづれとながめ暮せば*	286
問ふや誰我にもあらず	33, 85
問ふや誰我はそれかは*	84
年を経て物思ふことは*	90, 273
とどめおきて誰をあはれと	102, 105, 120
とまるべき心ならねば	144
ともかくも言はばなべてに*	65
友さそふみなどの千鳥*	6
取るも憂し昔の人の	226
問はるるも人はかくこそ	104
ナ	
なかなかにおのれ舟出る	15
流れつつみつの渡りの	264
なきながす涙にたへで	92, 192, 203
なき人の来る夜ときけど*	215
なぐさめにみづから行きて	222
なぐさめんことぞ悲しき	44
鳴く虫のひとつ声にも	35
歎かではいづれの日をか*	215
歎くやとなき折ならば	108
鳴けや鳴けわがもろ声に*	225
なでしこの恋しきときは*	151
などで君むなしき空に*	100, 108, 232

何事もみな古りにける 76
 名にしおはば五のさはり 7
 庭のままおふる草葉を 157
 庭のままゆるゆるおふる* 156
 脱ぎかへん事ぞ悲しき 253
 寝る人を起すともなき* 64~5
 寝し床に魂なき骸を* 280
 ねぬる夜の夢さわがしく 49
 ねられねど八重葎せる 245
 ハ
 はかなくて煙となりし 278
 はかなくも忘れにける 152
 はかなさにつけてぞ歎く* 198, 207
 はかなしとまさしく見つる*
 33, 39, 219, 232, 237
 花咲かぬ谷の底にも* 122, 209
 はななみの里としきげば 132, 256
 花よりもねぞみまほしき 50
 春雨の降るにつけてぞ 209
 春の夜の月はどころを 89
 はれやらぬ身のうき雲の 7
 引く人もなくてきのふは 31
 彦星は思ひもすらん 80
 ひたすらに別れし人の 221
 人知れず物思ふことは 181
 人の身も恋には変へつ 24
 人はゆき霧はまがきに* 286
 吹く風の音にも絶えて 280
 ふね寄せん岸のしるべも 14
 ふるさとの垣根のみぞ* 119
 螢火はこの下草も 24
 郭公しのびのこゑも 17
 ほととぎすむべもなきけり 19
 マ
 枕だに知らねば言はじ* 40
 待つ人はゆきとまりつつ

257~8, 272
 待つ人は待てども見えで 257
 まどろまで明かし果つるを 46~7, 233
 まどろまであはれ幾夜に 167
 まどろめば吹きおどろかす 200
 まれにても君が口より 271
 みかさ山さしはなれぬと 81
 みる人もなききにをれば 251
 見る程は夢もたのまる* 279
 身はゆけどとどまりぬるは 134, 257
 むば玉の今宵ばかりを 77
 もとむれどあとかたもなし 227
 物をのみ思ひし程に 199
 物思へば沢の蟹も* 5, 22, 30, 91, 272
 もろともに苔の下には 101
 もろともにたたましものを*
 15, 72, 176, 179
 ヤ
 山をいでて暗き道にを* 141~2, 159
 夕暮はいかなるときぞ* 45, 229
 夕暮は物ぞ悲しき 208
 ゆく春のとめまほしきに 180
 夢ばかりあはせたきもの 118
 宵毎に帰しはずとも 174, 214
 よそなりし同じ心には 182~3
 よそにても同じ心に 168
 世に経れど君におくれて 216
 世の中に憂き身はなくて*
 114, 211, 230
 世の中に苦しき事は 211
 世の中はいかになりゆく* 148~9, 207
 世の中は暮れゆく春の 217
 よの人はうらみもやせむ 149
 夜のほどに散りもこそすれ 260
 夜のほどもうしろめたなき 75
 よもやまもけしきも見るに 95

ラ				
例よりもうたて物こそ	278		わすれなむ物ぞと思ひし*	11
ワ			忘れなんそれは怨みず*	86
わが心夏の野辺にも*	224		わりなくもなぐさめがたき	114, 119, 215
わが魂のかよふばかりの*	31, 273		我ならぬ人もさぞ見ん	168
わかれても同じ都に*	20, 72, 176		我に誰あはれをかけん*	217~8
わが宿のもみちの錦	48		註 *印は著者による秀歌選。本文に大きく	
忘れずや忘れずながら	85		組んだ。	

目次

- 一 身と心
二 愛欲
三 措辞の特異さ
四 死、親子
五 阿保親王の裔
六 南院にて
七 挽歌
八 上東門院女房
九 死へ

あとがき

和泉式部和歌索引

一五 一六 一七 一八 一九 二〇 二一 二二 二三 二四 二五 二六 二七 二八 二九 三〇 三一 三二 三三 三四 三五 三六 三七 三八 三九 四〇 四一 四二 四三 四四 四五 四六 四七 四八 四九 五〇 五一 五二 五三 五四 五五 五六 五七 五八 五九 六〇 六一 六二 六三 六四 六五 六六 六七 六八 六九 七〇 七一 七二 七三 七四 七五 七六 七七 七八 七九 八〇 八一 八二 八三 八四 八五 八六 八七 八八 八九 九〇 九一 九二 九三 九四 九五 九六 九七 九八 九九 一〇〇

和泉式部

一 身と心

物思へば沢の螢もわが身よりあくがれいづる魂か
とぞ見る

(二七四)

言うまでもなくこれは、家集によるかぎりどの男をさすか分らないが、ともかく「男に忘れられて侍りけるころ」、貴船明神きぶねに参詣した和泉式部わいずんが、御手洗川みたらしのほとりに螢の飛ぶのを見て詠んだという歌である。それには、

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬のたまちるばかり物な思ひ
そ

(二七五)